日本からきました 第73回

いのちをつなぐ土地と水

text by Shinji Ishii
文 いしいしんじ

ふだん、飲むのも煮炊きにも、鹿児島の水をつかっている。「温泉水99」。桜島のふもと、垂水温泉でとれるわき水。うちの園子さんが注文し、定期的に12リットル入りの箱が6つずつとどく。

これという特徴はないな、とおもうくらい自然でのみやすく、極上の絹織物みたいにすっとからだになじむ。人間のからだの三分の二が水でできているのなら、とおもいいたると、からだに合った水を常用するのはたしかに理にかなっている。

その水が尽きたある日、たまたまか、水の神様が狙いを定めてか、「美楽」仕掛け人の東正任さんより、ペットボトル入りのミネラルウォーターが大量に届いた。ハワイ産。ラベルには「マハロ・ハワイ・ディープ・シー」とある。全米初の海洋深層水らしい。6歳の息子が見つけ、

「これなにー？」

手にとってゴロゴロ転がす。

「おみずや。のんでみよか」

コップにとくとく注ぐと、一瞬、潮の香がたちあがり、空気がちがう色に染まる。京都うまれの息子がひと口ふくみ、

「おいしーなーこれ」

僕も飲んでみて、こんな水ははじめてだと息をのんだ。まったく塩辛くはない。なのにのみくだしたあと、シュノーケリングを終えて浜にあがってきたときのような、深いあと味が残る。

夜中にひとり、スコッチウィスキーに少し加えてのんでみた。モルトの香がいっそうきわだつ感じがあった。よくできた焼酎やジンでも同じことだろう。そばや刺身に、ほんの少し塩をなすりつけて食べるようなもの。食物の微妙な風味がそれできわだつ。

島国であり山国であり、温泉大国である日本はわき水の宝庫で、名水、と呼ばれる水は枚挙にいとまがない。

息子と連れだっての、朝のランニングの途中、寺町丸太町下ルの下御霊神社に寄る。しずかな境内の隅、黒々とした石盆に、豊かな水がたたえられてある。地下からくみ上げられた天然の京都の水は、場の空気、時間と一体になって、ぼくたちのなかに流れ込み、味というより、生きている実感を、奥のほうからたちのぼらせてくれる。

その土地に生きている、つながっているから、わかりあえる水がある。京都はとりわけ古くからひとが住んできたところだから、ほかにも銅駝の水、梨木神社の井戸、伏見の水と、よく知られた水どころがそこいらにあって、四六時中、ペットボトルをもったおじさんおばさんが短い行列をつくっている。

ただ、持って帰るより、せっかくその場にいるんだから、ひと口でも飲んでいけばよいのに、といつもおもう。水は目にみえる液体だが、目にみえない空気にも、その水は溶けている。この星の上のその一点にだけ、地下深くからこの世に、透明な水がしみだしてくる、そのふしぎさ、軽い奇跡。

くちびるをすぼめ、張りつめた水面にそっと触れる。その瞬間、からだが立つ。喉を鳴らして飲みはじめると、そのかたちの柱のように、生命がこの場に立ちあがる。この場で水とからだが出会っているのは、けして偶然ではない。今日も地球はまわっている。その内奥で、秘められた水がゆったりと波打っている。

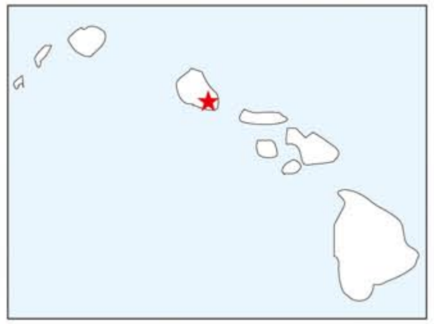
ときに大地は割れ、ひとの暮らしを飲みこんでしまう。土地と水は、生命の輪郭をぎりぎりで縁取る。だからだろうか、僕はいまだに、五年住んでいた信州・松本の水が忘れられない。その土地で僕は、おおぜいのひとの死に触れ、うまれかけた生命にじかにさわった。雨、雪、水蒸気、水道水。水はさまざまなかたちで僕たちの暮らしを囲み、濡らし、しみ通っていった。

庭の草むしりに疲弊し、極寒の朝身震いして起きても、コップ一杯の水を含めば「いま生きている」と腹の底から信じることができた。

この世から消え失せるにあたって、最後の水は、松本の水道水と決めている。僕はその透明のなかに溶けていくのだ。

いまマグカップにはいっているのは、ハワイの海洋深層水。水温があがってくるにつれいっそう塩味が強くなってきた気がする。といって、ほんとうにしょっぱさの欠片もないのがふしぎだ。あくまで気配、風味としての塩味。僕はまだハワイにいったことがない。島国であり山国であり、火山の島であるハワイ諸島。生きているからだの輪郭が、色濃い土地、という印象がある。海洋深層水にせよ山のわき水にせよ、その島で飲む水がきっとすばらしいから、おおぜいのひとが何度も何度もハワイに戻ってくる。

ハワイ、ということばのハは「いのち」を、ワイは「水」を指す。つまりハワイとは、「いのちと水のあるところ」といった意味らしいのだ。



ハワイ州（アメリカ合衆国）

州　　都：ホノルル
公 用 語：ハワイ語と英語
面　　積：28,311km²（全米第43位）
人　　口：1,360,301人（全米第40位）※2010年
合衆国加入順：50番目（1959年8月21日）

Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説『ぶらんこ乗り』『麦ふみクーツェ』『ポーの話』『みずうみ』『四とそれ以上の国』など、エッセイ『人生を救え!』（町田康共著）『熊にみえて熊じゃない』『遠い足の話』、絵本に『赤ずきん』（ほしよりこ絵）など多数。